



エチオピア

の

陸上競技を考える

◆山森哲氏◆

はじめに

なだらかな丘陵地帯とその向こうにどっしりと構えるカカ山を背景に、選手たちは列をなして走る。彼らを見つめ、時おり掛け声をかけるコーチは、これまでに何人ものオリンピック選手を育ててきたベテランである。調査地であるオロミア州アルシ地方ボコジ町は、ファツマ・ロバ、ケネニサ・ベケレ、トゥルネシ・ディババラ、世界の舞台上で活躍する陸上選手の生まれた町として名高い。人口1万6000人ほどのこの町では、彼らに続く第2、第3の国民的英雄となるべく、300人近い若者が日々トレーニングに励んでいる。この中から将来のオリンピック選手が育っていくのだろう。

陸上選手育成は、この町だけで行われているわけではなく、エチオピアの国家的事業である。こうした国のバックアップがあることが世界の陸上競技で主導権を握ることができている大きな要因であると考えられる。ここでは、その背景を少し早足ではあるが紹介していきたい。

近代スポーツの萌芽

エチオピアの近代スポーツは、サッカーから始まったといえる。メネリクⅡ世がイタリアに勝利したアドワの戦いの際、サッカーがイタリアから持ち込まれ、またヨーロッパで学位を取得したエ

チオピアの学生たちによって国内に紹介された。それ以前には、西洋式の近代教育と軍事教練に組み込まれたアスレチックや体操が行われていたが、それはあくまでも教育や訓練の一環であったと言える。競技を楽しむ目的で行われたサッカーは、その点で体操とは異なっていたと言えるのである。また、サッカーはプレイして楽しむだけでなく、見て楽しむ「娯楽」としても人々に受け入れられていった。

近代スポーツの普及には、欧米諸国の帝国主義とキリスト教が大きな役割を果たしていた。エチオピア初のスポーツクラブは、聖ジョージ教会によって1928年に設立されたアディスアベバの「聖ジョージ・スポーツクラブ」である。このサッカーチームには、アルメニア人やギリシャ人が所属していた。1936年にエチオピア初のスポーツオフィスが誕生するが、同年から5年に及ぶイタリアの占領期が始まり、その管理はイタリアによって行われることとなる。

イタリア占領期には、ファシストの人種差別的方針によって、欧米人とエチオピアの人々が共にサッカーをすることが禁止された。また、エチオピアの人々のためとして、「土着のスポーツオフィス」が新たに設立され、既に設立されていたエチオピアのサッカークラブは、チーム名をイタリア風に変更させられた。エチオピア帝国によって抑圧されていた人々を解放するという建前のもと、スポーツはイタリアの帝国主義を押し進める道具として大いに利用されることとなった。この期間、

国内のスポーツ大会数は増加し、1938年にエチオピア学校スポーツ協会、1940年には全国スポーツ協会が設立され、国内スポーツの組織化が進められた。

躍進の始まり

ハイレ・セラシエの巧みな外交戦術が功を奏し、1941年にイタリアが撤退すると、帝政が再び始まった。ハイレ・セラシエは、中断していた近代化政策を再始動させるなか、中央集権体制の基盤を固めるため、国軍の組織化と整備を進めた。ハイレ・セラシエ皇帝を護る親衛隊はエチオピアで最も近代化した軍隊であり、海外から軍事教練の指導者を招へいし、技術教授が積極的に行われた。1950年代にはエチオピア陸上競技が躍進するきっかけをつくったワミ・ピラトゥ、アベベ・ビキラ、マモ・ウォルデらが活躍を始めるが、彼らの所属が全て皇帝親衛隊であり、彼らの才能を発掘し、トレーニングを行っていたのが親衛隊のトレーニングコーチとして招かれたスウェーデン人オンニ・ニスカネンであったことは、こうした背景によるものであった。

国軍の近代化政策と期を同じくして、国内ではスポーツの組織化が進められ、1943年にサッカー協会が、1948年にはエチオピアスポーツ連合、陸上競技連盟が設立される。さらに同年、エチオピアオリンピック委員会がエチオピアスポーツ連合によって設立され、国内においてオリンピックへの窓口が用意された。こうした流れは他のスポーツにも広がり、バスケットボール、自転車、バレーボールなどが次々と組織化されていった。

教育機関における身体トレーニングについても、1949年に「学校間のアスレチックイベントの管理とエチオピアの学生の学校対抗試合、教育、健康とレクリエーションを通じた発展」を目的として、エチオピアインタースクール陸上協会が設立された。さらに、こうした政策を進めていた教育省は、独自の体育プログラムを立ち上げて、警察や軍で才能を発揮するような生徒を発掘するべく、年間15人の学生を選出し、スポーツ生理学、スポーツ理論、スポーツ哲学、スポーツ心理学を含む専門教育を一年間にわたって施した。

こうして国内スポーツの組織化が進むなか、19

56年にメルボルンで開催された第16回夏季オリンピックに、エチオピアは初めて参加する。残念ながらこの大会では成績が振るわなかったが、このオリンピックでの経験が、1960年のローマ五輪への布石となったことは確かであろう。よく知られるように、ローマ五輪のマラソン競技においてアベベ・ビキラは、裸足で他の追従を許さない走りを見せ、見事優勝した。続く1964年の東京五輪で、またもアベベは優勝を果たし、陸上競技におけるエチオピアの存在感を世界に知らしめた。

1968年メキシコ五輪では、各国の選手が高地対策をするなかで、マモ・ウォルデが優勝し、エチオピアはマラソン競技の一大勢力としての地位を揺るぎないものとしたのである。ハイレ・セラシエによって中央集権化と近代化が推し進められたこの帝政の時代は、まさにエチオピア陸上の黎明期ともいえる時代であった。

国家によるスポーツの管理と 第2世代の選手たち

1974年、エチオピアのスポーツを取り巻く環境が大きく変化する。クーデターによりハイレ・セラシエが退位させられ、メンギストゥ・ハイレマリアム少佐を議長とする軍部・警察合同委員会(デルグ)によって国家運営がなされるようになったからである。その後、デルグはマルクス＝レーニン主義を国家イデオロギーとする方針を示すが、当然ながらこのようなイデオロギーはスポーツ政策にも大きな影響を与えた。

デルグ政権は、次のようなスローガンを掲げている。

- 「スポーツと身体文化は、大衆に適している」
- 「スポーツと身体文化は、大衆文化となっていく」
- 「健康のため、生産のため、統合と勝利のためのスポーツ」
- 「統合、平等、兄弟愛、そして国際親善のためのスポーツ」
(Aleme 1982:52)

こうした信念に則ってスポーツ推進政策は、デルグ政権下の文化・スポーツ省によって進められた。国民統合のため、そして農民の生産効率を上げるための道具として使われたスポーツは、農民

組合へ派遣された教師や学生によって、「中央」から遠く離れたスポーツとは無縁の農村部にまで行きわたった。

こうした時代に、エチオピア陸上競技の第2世代ともいえる選手たちが育っていく。1980年のモスクワ五輪で活躍をしたミルツ・イエフタールやモハメッド・カッディール、エシエトゥ・トゥラをはじめ、現在も活躍を続けるエチオピアの英雄、ハイレ・ゲブレセラシエ、1996年のアトランタ五輪でアフリカ初の女性金メダリストとなったファトゥマ・ロバなど、エチオピア陸上競技の世界的な地位を確固たるものとした選手たちが現れてくる。彼らは、全員が軍や警察機関に所属しており、対外的にはエチオピアをアピールするために、対内的には国家イデオロギーの宣伝塔として利用された。

しかし、一方で選手たちが海外遠征をして活躍することで、彼ら自身も海外との独自のつながりを持つようになる。こうしたコネクションは、エチオピア陸上連盟の重要な基盤となり、国内の他のスポーツ協会とは異なり、資金力だけでなく、政府機関である文化・スポーツ省に対する発言力を大きなものにしてきた。さらに、こうした第2世代の選手たちが作り上げた基盤が、後続の選手たちに活躍の場を提供していたことも忘れてはならない。選手枠の確保、スポンサーの獲得、最新のトレーニングメソッドの輸入など彼らの果たした役割は非常に大きなものであった。

エチオピア陸上の躍進

第2世代の選手たちの活躍の場をつくりだしたデルグも、やがてティグレ人民解放戦線、オロモ解放戦線、エリトリア人民解放戦線の連携によって崩壊へ導かれる。その後、TPLFを中核としたエチオピア人民革命民主戦線による政権は、現在まで約20年にわたってエチオピアの国家運営を行ってきた。この間、エチオピアの陸上選手たちの競技環境は、少しずつではあるが変化してきているようである。

私が聞き取り調査を行ったボゴジ町の最年長コーチは、この20年近くで選手たちはかなり自由に競技を行えるようになったと語った。例えば、実力のある選手らが自分で海外の大会へ出場したり、

スポンサーを見つけたりといったことは、スポーツが国家によって厳格に管理されていたデルグ時代には困難であったという。また、2004年のアテネ五輪で活躍したボゴジ町出身のトゥルネシ・ディババも、アメリカの陸上競技専門誌でエチオピア女性のエンパワーメントについて触れ、この10年間で大きく改善されてきたと語っている。

現在、エチオピアの国家事業として陸上競技専門学校の設立や州のスポーツクラブ数の増加が図られている。調査を行った2009年には、エチオピア各地から陸上競技専門学校第一号となるトゥルネシ・ディババ・アカデミーに約300名の選手が集められている最中であった。コーチもまだ配属されておらず、寮や校舎も建設中であったことから選手たちも困惑気味であったが、出身地ごとにグループを作り、なんとか生活を始めていた。

こうした国家事業の背景には、有力選手を育て上げ、そうした選手のネームバリューを利用した国威の発揚や宣伝につなげたいという思惑があるように思える。しかし、発展途上にある選手たちの立場に立てば、アベベ・ビキラやハイレ・ゲブレセラシエのような国家的英雄への道が拓けるといだけでなく、陸上競技で生計を成り立たせることができるチャンスが増えると捉えることができるだろう。

むすびにかえて

「どうしてエチオピアの選手は速いのか」とよく聞かれる。その答えは私には皆目見当がつかないのだが、これまでも見てきたように歴史・社会的な背景が、その解を導く一つの大きな鍵ではないだろうか。アベベが親衛隊のトレーニングコーチに、ハイレが村の学校の体育教師にその才能を見出されたように、その時代の社会構造の中で、ある特定の位置にいる人々によって陸上選手が育成されてきたことは注目すべきことである。

ボゴジの陸上クラブの選手たちの話を聞くと、過去に活躍した、または現在も活躍している選手への「あこがれ」が一樣に語られる。こうした「あこがれ」は、ボゴジ町の場合、具体的には成功した選手たちが建てたホテルや寄付などの行為をさして語られるのだが、このように、選手たちの陸上競技への内発的な動機づけを引き起こすものが

一体何であるのかを明らかにすることで、エチオピアの陸上競技がトップレベルであり続けることを個人のレベルから説明することができるかもしれない。

さらに、より広い視点で見れば、これはスポーツヒーロー生成のメカニズムの一部であるともいえる。ヒーローが、「それぞれの時代や社会を象徴する価値を体現し、大衆の思い描くファンタジーを代理的に現実化」(橋本 2002:267-268)するものであるならば、人々があこがれる陸上選手たちの

振る舞いをみることで、エチオピア社会が陸上競技や選手自身に対して何を求めているのかを知る手がかりとなろう。これらについては、今後十分に検討をしていきたいと考えている。

Aleme Eshete, 1982: *The Cultural Situation in Sociologist Ethiopia*. Paris : Unesco.
橋本純一編 2002: 『現代メディアスポーツ論』世界思想社。

(やまもり・てつし/元・南山大学大学院
人間文化研究科)